

令和2年8月1日発行 春燈/第75巻第8号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

# 春燈

8月号

2020 August



## 久保田万太郎の句

單帶かくまで胸のほそりけり

『流雷抄』昭和三十三年

この句は、春燈の重鎮であった鈴木真砂女を詠んだ句だろうと、私は勝手に思っている。同じ万太郎師の句に「夏瘦やひくめにしめし帯のまた」もあり、弟子であった真砂女への深い慈愛に満ちている。真砂女の生き方をも、あたたかく見守っている。万太郎師の句は、言いまわしも、表現も奥が深い。根底には、人への愛をしみじみと感じさせる思いがある。

永井 恵子

## 久保田万太郎の句

秋立つやてぬぐひかけの手拭に

『これやこの』昭和二十一年作

掲句に詠まれているのは、手拭、ただそれだけである。しかし一読の後、ごく平凡な家庭の洗面室が現れ、そこに几帳面に掛けられている真っ白な手拭が浮かび上がる。そして、その手拭で丁寧に手を拭く作者の姿までもが映像化されてくる。「秋立つ」と「手拭」との「物衝撃が生み出す平穏な世界。結句の「に」が持つ余韻は、爽やかな朝の気配へと広がっていく。いよいよ秋である。

近藤 真啓

安立公彦



梅雨寒の朝の珈琲まるやかに

疫病よ失せよ青葉の駿河台

休校の子ら無き校庭梅雨の蝶

柏餅つつむ母の手若かりし

短夜のラジオが流す「昭和」かな

燈下集

○ 佐藤信子

退屈といふ暇もてあます薄暑かな

枇杷の実のぼろりと本音洩らしけり

箒目の山河を越えて蟻の列

大仏殿伽藍の下の蟻地獄

沙羅咲いて聖武天皇勅願寺

○ 山内四郎

ゆく春やひとりぼつちの腕を組み

夏に入る今日といふ日の朝御飯

病院へ妻送り出すつばくらめ

あめんぼうに踏まるる水のへこみをり

初夏の空の半分海の上

○ 園部露郷

鳥雲に入るまで眺め畑仕事

薯植糸て老いの嘆きは詠ふまじ

薇のおつむてんでん左巻き

袋掛く空の青さを包みては

母の日も野良着の母でありしかな



○ 西川保子

返信のブルーインクや聖五月

草矢うまかりし子にはや半世紀

夏つばめの一閃に憂き払はるる

古窯の歳月ながし八重葎

佇みて齡うべなふ木下闇

○ 松橋利雄

天折の田舎教師や花袋の忌  
駅までの道のり霽るる樟若葉  
剥きをへし蚕豆妻にわたしけり  
折鶴に薄暑の無聊なぐさまず  
藤椅子に敦忌の雨上がりけり

○ 橘正義

薔薇の庭心ゆくまで拝見す  
薫風や園児等じつとしてをれず  
新緑に染まれる雨となりけり  
柚子の花かきわけ去年の柚子採りぬ  
雷鳴にびつくりしつつ晩酌す

○ 小林のり人

窓全開駅ごとの花吹雪かな  
目の辺り古戦場かな山桜  
乗客無き新幹線や昭和の日  
港町へ峠三つや朴の花  
籠ひとつの入園料やさくらんぼ

○ 三上程子

部屋中のがらくた愛しこどもの日  
愛鳥週間窓開けて風通しけり  
麦秋や四方より過去の駈けてくる  
木苺や誰にも言はず言へぬこと  
世話好きの女の急かす更衣

○ 中野あぐり

芍薬のはなびら崩す夜の地震  
夏至の日の噴水少女らが囲む  
白南風や椅子ことごとく海に向き  
夕弥撒や雨滴となれる夏の霧  
木槿咲く人を遠しと思ふとき

○ 綱徳女

和女逝き遺されし身の花に佇つ  
高橋和女亡きあと耐ふる薄暑かな  
両親も兄もみな亡し蛩とぶ  
九十歳惜しみつ囲む金玉糖  
手を添へて景を見直すサンガラス

○ 中村嵐楓子

卯の花や意中の人に加舎白雄  
五月燦々若き日カミュにとらへられ  
緑蔭にグレイマスクの尼僧かな  
夏蝶と出会ひがしらの至近距離  
背を丸め小町老いたり夏柳

○ 松本峰春

早朝に売切れ御免初鯉  
忘れものあるごとと蛩急に飛ぶ  
若竹のしなひてそこらぢゆう清む  
夕焼消ゆ一番星をおきざりに  
大夕焼一日分を燃えつくす

○ 鷹崎由未子

六月の富士は裾野をひろげけり  
今日よりは明日の幸せ雲の峰  
麦の秋奥歯かむくせいつよりか  
泰山木の花ポツと開けばそこに幸  
蜻蛉生る記憶そこからはじまりぬ

○ 木村傘休

平らかな風を羽織りし青田かな  
石楠花や木喰仏の深き笑み  
古茶汲んでその後の所行尋ねけり  
どう見ても女は強し古茶新茶  
二人して自粛の贅の新茶汲む

○ 鈴木鳳来

夜も更けて雨戸を叩く虎が雨  
たまさかの尾長の声や梅雨兆す  
山百合の香のたつ伊良湖岬かな  
学僧の夜の修行や仏法僧  
天人の衣むらさき花菖蒲

○ 加藤良子

遠き日や逆さ富士見し夏休み  
胡蝶蘭今年も元気に咲きました  
久々の友の電話や青葉風  
敦忌やそと撫でてゐる鞆し草(句集の表紙)  
カラフルなレインボーブリッジ夏の夜

# 余

## 言

安立公彦

返信のブルーインクや聖五月

西川 保子

ペンと言えば、普通には万年筆やボールペンを指すが、以前には付ペンの時代があった。繊細なペン先に付いた青いインクは、無意識のうちに、書くことの愉しさを伝え、文筆家を育てる一助となったのである。

この句、「ブルーインク」が善くその思いを伝える。知人への返信。「返信のブルーインク」には、遙かな往年の思いも感じられ、それは「聖五月」ともひびき合う。この句には、そういう思いが深く宿っている。

麦秋や四方より過去の駆けてくる

三上 程子

「麦秋」、善い言葉だ。秀でた季語である前に、言葉そのものが、季節の悦びと収穫への期待を併せ持っている。

この句、その「麦秋」を、上五で大きく切字を持って安

定させている。句を読む人は、「四方より過去の駆けてくる」にしばし黙考する。「四方」は東西南北、「過去」は時の流れ、「駆けてくる」は、過去の種ぐさであると共に、作者の思いである。そういう思いを、「麦秋や」がしっかりと現実に戻している。「俳句」と言うものの容量の大きさを、改めて諸う句と言えよう。

引明けの空の句やほととぎす

鈴木 直充

「引明け」は明け方、「空の句」は単なる香りのみでなく、夜明けの視界に写る、天空を含む自然の大らかな対象を指す言葉と受け取りたい。そこまで読み取るものを、この上五中七は備えている。「引明けの空の句や」である。

この句、季語の「ほととぎす」が適格だ。この「ほととぎす」により、上五中七が活きて来る。今、手許の電子辞書により、ほととぎすの鳴き声をしばらく聴いている。景が見えて来るようだ。

田水張る水に力の戻りけり

武田 巨子

田植えは、私たちの生活を支える米穀生産の第一歩であり、これからもそうあり続けるだろう。田水を張った田植え前の田園風景は、見る人全ての心を豊かな思いにさせる。この句、そういう田水を張り終わった田の面を、「水に

実行を伴う。「みつ豆」は「余生」に適う。

たはむれに拾うて軽し落し文

矢口 笑子

「落し文」は、小甲虫が広葉樹の葉を巻き、卵を産みつけ、幼虫は筒の中で育ち、それが地上に落ちていたのを、昔の人は「時鳥の落し文」と呼んでいた、と辞書は記す。「落し文」は、季語としては此処に書いた物を言うが、オトシブミ科の甲虫の総称でもある。

この句は文字通り軽い。その軽みに俳諧味があると言えよう。「たはむれに拾うて軽し」は、「落し文」への挨拶である。見事な上五七中と言えよう。

ひと雨に若葉ふくらむ今朝の庭

持田 信子

この句を見て頷く人は多からう。わが家の庭隅に一本の柿の木がある。五月になると、柿の若葉は日ごとに葉身を拡げ葉の厚みを確かにする。まさに「若葉ふくらむ」である。そういう柿の若葉を見ていると、俳句と言う文芸を知り得た幸せを思う。植物の成長の過程を見極めるなどと言う、専門の知識は要らない。「ひと雨に若葉ふくらむ」を感じることで充分である。そしてその対象との感じ方こそ俳句の道である。対象を詠うのに空想は不要だ。実感は自ずと俳句の道を歩む。「今朝の庭」の結びは善い。

力の戻りけり」と詠んでいる。同感だ。「水面」という現実の田園と、「力」という精神力を一体としたところに、表現の力強さを感じる。次は豊穣を願うのみだ。

面影の祖父の辮髪竹夫人

廖 運藩

「竹夫人」は「竹婦人」とも書く。夏に涼を取るために抱いて寝る竹籠。中国からの伝来で、江戸時代に用いられていたとある。「辮髪」は男の髪形。頭髪を一部残して剃り落とし、残りを編んで長く垂らしたものと、辞書は記す。遙かな昔、私も見た記憶がある。

この句、「面影の祖父の辮髪」に、祖父の容姿が浮かんで来る。作者にとっては忘れ難い祖父であり、その「辮髪」だったのだ。「竹夫人」が善く効いている。

みつ豆や自粛豊かに余生の日

清水 美子

新型コロナウイルスの被害は、発生以来六ヶ月を経て、尚その伝染力の弱化を見ない。全世界の病者は、六月十二日現在、七五二万人、死者四二万人とのこと。我が国でも感染者一万七千人、死者九二〇人。まさに恐怖其の物だ。作者はしかし、この疫病下、布告された自粛を慎み受け入れ、それはむしろ、「自粛豊かに」の思いに勤しむのである。更に作者の思いは、この自粛を、「余生の日」と捉える。これは諦めではない。自粛への確かな自覚である。自覚は



# 当月集

安立 公彦選



○ 室井津与志

類なき春や三密慎めと  
三密とふ言の葉をどる日永かな  
栄冠の輝く場なき夏の子等  
オアシスの若葉の風のメールかな  
虎杖の花や虜囚の住処跡

○ 田中嘉信

○ 佐藤まさ子

霞敷く丹沢の嶺々富士真白  
爪弾けば微風に散る松の花  
彩りもて街を縁取る躑躅かな  
コロナ疲れ癒す散歩や花木  
母抛るボール追ふ子や新樹光

○ 山浦紀子

○ 佐俣まさを

薬局の「サトちゃん人形」昭和の日  
青き夜の風にはづむや手毬花  
背伸びして手を洗ふ子や夏ぎざず  
花柚子の風に膨らむ気配かな  
夏来るジーンズ青く空青く

雨垂れば母の里唄繡毬花  
すまなささうに呉るる筍香りけり  
「三密」に遠き山畑大豆蒔く  
瓜揉の鉢は手捻りひとり酒  
菊芽挿す土の匂へる通り雨

# 春燈の句

安立 公彦選



ソプラノの胸眩しかりけり夏始  
いちづなる詩何時迄も青葉木菟

東京 小林 文良

世の軸を矯めたま粽結ひにけり

成田屋の見得無辺なりアマリリス

たてよこの等差数列植田かな

青黒くうかぶ稜線明易し

短夜の家ごもりはらす長電話

立ちのぼる煙畑に明易し

進学のそれぞれの子の便りかな

仏壇の位牌の父母へ豆の飯

衣更へて夫のブリキの衣裳箱

とべら咲く島に寄港のイージス艦

世の日や夢の中でも叱らるる

更衣夫の遺せる作業服

神奈川 辻 泰子

岡山 重実ひとみ

御移りに豆飯届く旧知かな  
夏兆すデパート閉店の話題かな

憂きことはきつぱり流し冷さうめん

禅僧の御手前清か沙羅の花

泡盛や酔ひしまなこに紫紺の海

信念の固きを言へり更衣

髪切つていつもの顔や五月尽

老鶯や庭にしぼしの憩ひあり

麦秋やこの一帯の散歩道

杖買うて確と歩まむ五月晴

悪疫退散願ひは空へ火花かな

薄紅のまま落ちゆくや夏椿

柿若葉身を慎みて安らけし

兵庫 川端 正紀

大阪 淡路久仁子

岐阜 種田 利子